

## 論文の内容の要旨

論文題目： 乳幼児の守り手の防災イメージ向上のための一手法の検討  
(Method for Improving Disaster Management Imagination  
of Little Children's Guardians)

氏名： 阿部 真理子

「適切な防災対策を行うためには、災害状況の想定が欠かせない」という類の言説を、防災の内容を扱ったウェブサイトや書籍、講演等、様々な媒体で目にする機会がある。「災害状況の想定に基づく防災対策」は、防災関係者の間では、もはや定説となっている状況と言える。しかし、この「災害状況の想定に基づく防災対策」を行うために必要となるプロセスや、想定の違いに考慮すべき点にまで踏み込んだ言説はごくわずかである。このような状況では、実際に一般の人が災害状況の想定に取り組むことは難しいし、結果として一般の防災訓練をはじめ現状行われている諸対策には、災害状況とのズレや偏りが見られることが少なくない。

本論文では、この「適切な防災対策を行うための災害状況の想定力」を「防災イメージーション」と定義し、個人から集団にいたる「防災イメージーション」の形成を目的としたワークショップを設計・実践した。その際、日本における代表的な災害の一つである地震災害を対象とし、保育園を単位とする集団を実践フィールドとした。

保育園の現場では、地震や火災等の災害に対し、以前より設備点検や毎月の避難訓練等の対策がとられてきた。また、近年の動向として、乳幼児への防災教育に関する取り組みも行われだしている。しかし、行うべき防災対策の全体像を考えた時、これらの訓練や教育はごく限られた一部を扱っているに過ぎない。また、訓練や教育で想定している状況には、様々な面で災害発生時に起こりうる状況とのズレや偏りが存在している。例えば、保育園で一般的に行われている地震時避難訓練は、時系列のフェーズは地震直後、対応行動の種類は避難に偏っており、余震は考慮されていないことが殆どである。そもそも、保育園において避難訓練を行える状況は限られており、散歩中、食事中、午睡中など、地震が発生すると対応に困る状況ほど訓練実施が困難である。そこで、保育園関係者内で、個人から集団に至る地震防災イメージーションを形成することで、既存の保育園の防災対策を見直し、避難訓練や対策を再検討することが有効となる。よって、本研究では保育園の個人から集団に至る地震防災イメージーションを形成するためのワークショップの実践に取り組んだ。このワークショップでは、まず地震発生時の状況に影響を与える諸要因（特性）を考慮し、各々の参加者が

自分を主人公とする災害発生時の物語を時系列に沿って記述する。この作業により、記述者の災害イメージーションが形成されると同時に、疑問や不安、課題も顕在化する。その後、並べた物語を土台に参加者間で話し合うことにより、災害イメージーションおよび疑問や不安、課題が共有され、集団としての防災イメージーションが向上する。本論文では、以上のワークショップの設計および実践による検証をおこなうとともに、保育園の地震防災イメージーションを形成するために必要な支援についても考察を行った。本論文の成果は、以下に示す通りである。

第1章「序論」では、本研究の背景と目的を述べ、既往の研究を概観することにより本研究の位置付けを示した。また、本研究の構成と内容を説明した。

第2章「保育園現場の日常と防災対策」では、フィールドワークやヒアリングを通して把握した保育園現場の日常および防災関連の諸活動と課題をまとめた。また、行政等の関連機関と保育園との防災上の関係についても述べた。

第3章「ワークショップの設計」では、目黒（1999）によって考案・実践されている災害状況のイメージトレーニングメソッド「目黒メソッド」を保育園等の場で実施しやすくするため改良したツール「目黒巻」の設計過程および目黒巻を用いた保育園での集団的防災イメージーション形成のための防災ワークショップ「目黒巻 WS（ワークショップ）」の設計について述べた。

第4章「ワークショップの実践と考察」では、一連の目黒巻 WS の実践とその成果について記述した。このワークショップの実践によって、「WS 参加者（保育園職員または保護者）間の地震防災イメージーションの共有と向上による、地震防災対策の改善」という1次的成果に加え、「保育園職員および園児保護者の地震防災イメージ情報の集積」という2次的成果も得られた。目黒巻 WS の実践に取り組む際には、しばしば課題や葛藤が生じたが、これらも保育園の防災に関する今後の研究・実践の一助となると考え、含めて記述した。最後に、目黒巻 WS の実践によって得られた保育園職員および保護者の地震防災イメージ情報に関する分析と考察を行った。WS の実践を通して、以下の事が実証できた。まず、各々の参加者が自分を主人公とする災害発生時の物語を時系列上に記述する作業により、記述者の災害イメージーションが形成されると同時に、疑問や不安、課題も顕在化する。また、記述後に時系列に沿って並べた互いの物語を踏まえて話し合うことにより、疑問や課題が共有され、集団としての防災イメージーションが向上する。モデル園等での WS 後の調査からは、WS を踏まえたその後の取り組みの結果、ソフト・ハード両面での防災対策が進展したことも確認された。さらに保育園、高齢者福祉施設、病院、家庭、高校等の様々な場での WS 実践により、WS プログラムやツールのバリエーションが増え、プログラム設計における考慮点が健在化した。

第5章「地震防災イメージーション向上のための支援情報」では、保育園職員や保護者らが地震防災イメージーションを共有・向上するために必要な支援情報に関して述べた。重要な支援情報の一つとしては、災害イメージーション WS の際に参考にできる、災害発生前後

の経過時間帯や課題の内容に沿った参照情報の提供が挙げられる。そこで、過去の災害や乳幼児福祉・防災分野の知見をもとに、WSの際に参加者が参照できるような「参照用災害状況ストーリー」のモデル例を作成するとともに、その作成過程を整理した。過去の災害事例としては、主に新潟県中越地震（2004年）の被災地の妊産婦・乳幼児保護者に書いて頂いたアンケートを参考にした。作成した災害状況ストーリーを基に、成果物として完成させた東京都の妊産婦・乳幼児保護者向けのパンフレットについても説明した。

第6章「保育園における地震防災の再考」では、前章までを踏まえ、防災イメージションに着目した保育園における地震防災について検討し、保育園の防災対策を支援する際に考慮すべき事項を整理した。

第7章「結論」では、本研究全体を通して得られた成果を総括するとともに、今後の課題を示した。